

# 農業土木を 支えてきた人々

## 北楯大堰開削の先覚者、北館大学利長

加藤 三郎\*

### I. まえがき

この地域は、庄内平野のほぼ中央に位置し、最上川下流部の左岸に沿い、羽黒山から発する京田川との間に介在する、東西 18 km、南北 10 km のやや長方形の土地で、区域の最上川寄りに国鉄陸羽西線が東西に走り、川に沿ってやや高い、いわゆる陸（岡）所地域と、田所地域の境をなしている。また国道47号線の大方は、陸羽西線と相ならんで、区域内を横断しており、国鉄羽越本線が区域のほぼ中央を南北に縦走している。

この地域は東田川郡立川町、余目町、藤島町、および酒田市の一市三町にまたがる水田 6,900 ha、米生産量 400,000 ton に達する地区で、全国屈指の穀倉地帯と呼ばれる庄内平野においても、典型的な水稲単作地帯である。

地域はわずかに東から西に傾斜する、たんたんとした平地で、立川町大字狩川の東端での標高は、19m内外を最高とし、余目町大字余目においては、8.3 m ないし 4 m と、東北より南西に向って傾斜し、この付近一帯は、自然勾配約 1,400 分の 1 程度で、土質は、おおむね沖積第 4 紀層に属し、表土は、植壤土または砂壤土で、心土は植土である。

この地域には、従来から 2 つの灌漑用水系統があり、その一つを北楯大堰、また一つを吉田堰という。

北楯大堰は、用水源を最上川の左支川立谷沢に求め、面積約 5,000 ha を灌漑している。その起源は、遠く慶長 17 年（1612 年）に溯り、開削者は、出羽国狩川（現東田川郡立川町）の城主「北館大学利長」である。

### II. 大堰開削の由来

北館大学が、就任当時の最上川以南の地は、広漠とした不毛の地が、水利の便のないまま放置され、領民が、貧困にあえぐ窮状を見るに忍びず自から水源を探索し、調査測量計画を練り、主君最上義光に、大堰開削の疎水

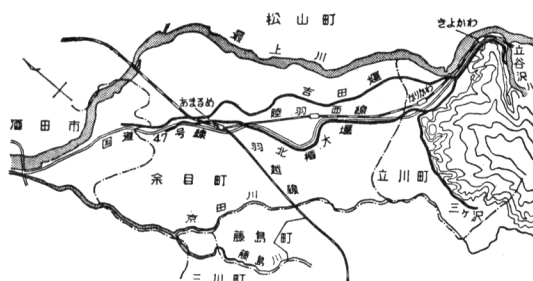


図-1 北楯大堰位置図

事業を献策し、その許可を得て幾多の苦難を克服し、生命をかけて完成した一大疎水事業である。

#### 1. 北館大学利長

慶長 5 年（1600 年）9 月、関ヶ原の戦いも終り、天下は、全く徳川家康のものとなり、家康は、大いに諸将の論功行賞を行った。この時山形城主、最上義光は、豊臣方石田三成の上杉景勝の東上を食止めた大功で、攻めとった庄内全部と由利郡（秋田県）を加封されて、70 万石の大名となった。ときに慶長 6 年 8 月であった。

最上義光も同様部下将士の戦功を賞して、最もすぐれた者に城を与えて、その城主とした。庄内すなわち東禅寺（酒田亀ヶ崎）3 万石は、志村伊豆守、尾浦（大山）2 万石は、下対馬守秀久、藤島 7 千石を新関因幡守久正、「狩川 3 千石を北館大学利長」が、それぞれ城主となる。狩川城主に赴任したのは、慶長 6 年 8 月であり、資性剛直にして、仁愛の情に富み、単に武勇にすぐれたばかりでなく濟世の人で、殖産興業に対する才能にいたっては、その達人も及ばぬ驚異的なものであって、最上侯の一小城主としておくには惜しい存在であったとある。

北館大学の晩年は、徳川幕府の苛酷な大名取潰し政策によって、山形城主最上義光も元和 8 年（1623 年）7 月退転を余儀なくされ、北館大学も一浪士となる。庄内酒井氏の仕官のすすめにも子と甥とを推して、静かに余生

\* 山形県最上川土地改良事務所（かとう さぶろう）



写真-1 北館大学利長の像

をおくった。そして、寛永2年(1625年)7月20日享年78才で遠逝した。法号は最上院殿安庭慶公大居士。東田川郡立川町大字狩川、大椿山見竜寺の墓所は、山形県指定史跡である。安永7年(1778年)大学の大堰開削の徳をしの館水神と崇め、現北館神社と称す。

## 2. 大堰開削の企画請願

北館大学は、領地の有様を知ること政治の第一歩とさっそく一巡して、あらゆる面から検分したが、あまりにも荒廃した状況には、大いに驚き、領民を思う大学の情熱をしてこの問題の解決に対し一大決意をさせずにはおかなかったのである。

荒廃の原因は、水利の不便にあることは一見すれば明瞭なる事実であった。とくに最上川東北部の沿岸が悪く、わずかに狩川方面の山手に住む者は、溪流や湧水を利用して、一度干天になれば、枯渇して悲惨な状況であった。

地域は、最上川に接し、京田川、藤島川が貫流して水利に恵まれているが、河床が低く流量豊富でも高地への灌漑は、とうてい不可能な自然的環境であった。そこで、大学は、わが身を犠牲にしても領民の生活安定を図るため決然として大堰開削の一大悲願をたてたのであった。

以来大学は、神仏に祈願をこめて、大願成就を祈り、朝に夕に水源を訪ねては、山河溪谷を駆けめぐり東西南北に、寝食を忘れてその探究に没頭した。工事容易な箇所は、河床低く、また河床高く水量豊富な所は、岩石重畳して地形険悪で、当時の技術ではとうてい至難と思われる難所がいたるところにあるのみであった。朝に新た

な希望と期待にもえて出発し、あるいは、溪谷にわらじをとられ、あるときは、人類未踏の山に足を運びて放心し、河川をさぐり水源を求めては落胆し、涙ぐましい努力と苦勞の連続で10年余りの歳月が過ぎていった。

今はとるべき手段はすべてとりはたしたが、しかしこれぞと思う手掛りなく、心痛のあまり、眠られぬ夜が幾日も続いたほどであった。

あるときふと脳裏に、天啓のごとくひらめいたのは、立谷沢の流れであった。当初は、大学も当然真先にこれに着眼し、幾度となく踏査し調査したが、用水導入の可能性なく今日に至ったものであった。

すなわち、その当時水路と目したところが二つあった。一つは岩石量々として相重なり当時の土木技術をもってはとうていできない難所であり、他の一つは最上川の本流が岸壁に迫りて、これも容易な所ではなかった。二つとも成功の確信はさらになかったが、わずかに第二の場所は、前者に比して、やや見込はあったが、たとえ成功するにしても莫大な費用と、長年月におたる努力を必要とする懸念が多分にあったので、他に適当な所はないものかと、今日まで苦心を重ねてきたのであった。このままにむなしく時を推移すれば、自分の無能をそしめる声は、いよいよ高まるばかりである。大学は遂に、立谷沢川より水を引く事に意を決したのであった。

それからいよいよ水路の実測設計に従事したが、実際調査の結果は、最初心配したよりも、以外に容易なる事を発見した。これこそ日ごろ崇敬せし神々のおかげと、感謝と喜びに、さらに十分計画を練り、ついに満足なる確信を得、工事設計書および水路測量図等を作成し、主君最上義光に、大堰開削工事の認可を請願した。時に慶長16年(1611年)10月、計画樹立以来11年目である。

請願書を受理した最上義光は、事業の重大にして、かつ容易ならざるを感じ、重臣会議を開いて決することになった。家老清水大蔵大夫光氏をはじめとし、大学請願の事業について会議が開かれたが、清川西方の箇所は、最上川の急流が岸壁に迫って、水路敷がなく、とうてい不可能であって、また莫大な費用と努力を費やすことは、時期尚早であるとのことであった。

大学は、大いに驚き山形城に出仕せんとする矢先に義光の使者があつて、「下問致したとき儀あり速やかに伺候せよ」との命があつた。ただちに義光に面接し先に提出した計画書に基づき詳細に意見を申し述べるとともに、「吾もし此業成らざれば堰上にて、いさぎよく切腹致し御詫び申上る」と決死の覚悟を面にみなぎらせて言上した。

義光その後ひそかに、工師若狭に命じて、狩川に派遣

し、水路を測量させて工事の難易等を調査したが、大学の具申と同じ成功の確信があったので、義光は、周囲の反対をおしきって、断固工事を進めることに決定した。

「北橋家先祖代々ノ覚」の中に、「大工棟梁若狭ト申者清川へ越被申則右ノ所々へ水ヲ盛り見申候得者大学見立之通水十分ニ上リ可申由罷帰具ニ出羽守達耳申候得ハ則普請可仕由被申付」とある。

また庄内在城の諸将を、大堰開削奉行に任命し、大学を援助し、費用は、庄内の蔵人の中より支弁されることとした。

### 3. 工事の概要

工事請願、慶長16年10月。

起工、翌年、慶長17年3月5日。

完成、同年、慶長17年7月21日。

所要人員数、6,187人。

用水開削延長、17,442間(31,744m)であり、約4カ月で完成とあるが、「北橋家先祖代々ノ覚」に見えるところは、「堰之長サ清川堰口ヨリ三ヶ沢迄五千九百六十間此間ニ山切割候所有是右之所奉行共間数ニテ請取方人夫ヲ差普請申付候人足ハ最上庄内油利仙北ヨリ相詰狩川ニ大分ノ仮小屋ヲ立罷在候右之者共持方ハ庄内蔵前ニテ可為取由被申付候事」となっている。

「北橋大堰誌」は、「かくして成りし大堰の幹線は一は三ヶ沢方面一は余目新堀方面一は中央長沼方面の三大線にして当時延長実に一萬七千四百四十二間なりといふ」と記し、三大幹線の同時竣功のことを示すようである。開削の前後、所要日数については、異説がないわけではないが、同時竣功をとっている。

古文書、義光の書状、5月18日、北館大学あてに、「其元普請無心元候間重而及一書候一日二日之間ニ二千間三千間出来候由承候野陣ニ相詰夜昼之無差別相稼候由聞候……」とある。

三大線17,442間にあつては、取入口から三ヶ沢方面約6,000間の区間が難工事であると記してあり、またこの区間には、最も難工事とされた箇所があつて、これを「大堰台」と称して記録されている。

工期について種々考えられることは、この大堰台に工事日数の大半が費やされ、他の2路線は、平地であつて書状に見られるように、1～2日で2,000間、3,000間開削できたものと察しられる。また同時に当時の北館大学の測量技術が、いかに精度が高いものであつたかがうかがわれる。

当時の水路状況等を知るには、承応4年の「狩川大堰絵図」(写真-2)がある。

開削所要人員数6,187人については、次の古文書に記

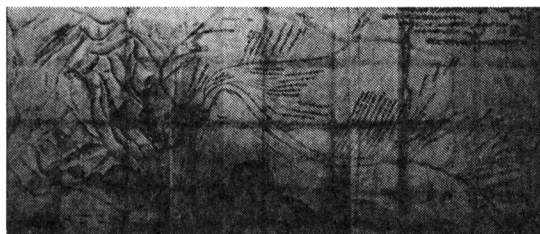


写真-2 狩川大堰絵図(承応4年)

してある。

「義光の書状」

慶長17年壬子8月5日付、「今度其他関普請大分之事其方存立日夜之苦勞察入事候併首尾能成就其上立谷沢川ヨリ水関へ沢山ニ通候由色々庄内末世之重宝ト致置候其水関々へ取新田何程末々出村々モフエ可申事何ヨリ悦入事候関之人足割付先日此方へ越候披見申候」とあつて、油利、岩屋、亀ヶ崎、鶴ヶ岡、大山、櫛引、都合十二万三千七百四十七石、此人足合六千八百八十七人…とある。

すなわち、百石5人にあたる。なお、これに地元狩川、清川およびその他奉行の人数を加えて総計7,400余人と、大堰誌に記録されている。

開削工具については、次のように記されている。北館君廟碑に、「於是北館君励衆親執耡力作不舍昼夜」とあり、耡はサフと読み、すぎと註を施している。鋤は土壌を掘削する手農具で、また岩掘削にあつては、岩上にたき火をして、脆弱せしめる方法、また測量は暗夜に提灯の明り、また義光が、工事決定するにあたり「大工棟梁若狭」を調査せし中に、「水ヲ盛り……」とあり、その当時はうかがえる。とある。

起工式が行われた場所は、現在の取入口より上流1町ほど先とされており、起工については、「北橋家先祖代々ノ覚」の中に、「慶長17年壬子年3月5日ヨリ堰普請企申事」とある。大堰誌では、次のように記している。

大学主従の丹精の甲斐ありて準備万端滞りなく整頓なりぬ、明けて慶長17年、陽春3月5日、工事起工式の当日である。

出羽守義光の下知により、酒田の城主志村伊豆、大山の城主下対馬守、ならびに鶴ヶ岡の城代新関因幡を始めとして、出羽十二郡の諸将は、それぞれ家臣と人夫共を召連れ威風堂々隊伍を整えて、清川表に歩を進めあらかじめ定めたる河水取入口すなわち大木門において厳かに挙行される晴れの起工式に参列した。

式終了後一隊は水路の各所に分散して、宿泊所、炊事場、休憩所等のおのおの係員の指揮にしたがつて、準備に取りかかり、他は直ちにそれぞれ現場に配置されて、此処において初めて大工事はいよいよ其の第一歩を踏み出

したとある。

### 「大堰台」

大堰開削にあたり、最も難工事とされたところは、取入口から三ヶ沢方面約6,000間、(10,920m)とあるが、その中でこの箇所は、北館大学が水源探索して、11年目で、やむにやまれず決行請願した箇所であって、岩石畳々とした箇所、また最上川の主流が岩壁に直流している箇所、ここを堰台と称している。

この難工事にあたっては、災害事故、奉行の妨害等で工事は遅々として進まず、また16名の犠牲者もあって、北橋大学が、諸神を念じ身命をかけた、最も苦勞したところとして大堰誌に記録している。

大堰台は、現東田川郡立川町大字東興野より、大字清川にして、旧道あり、陸羽西線があり、最外側を国道47号線があって、昔の難所の姿は、まったく見られないが、大堰台として記録にあると思われるものは、東田川郡立川町大字清川にある清川神社に建てられた、清川八郎記念館に、江戸時代の延享元年(1744年)ごろの清川の市街を描写した絵図がある。その図の最上川縁に「出シ」の描かれているのがみられるが、当時の水制工法と思われるものである。

この「大堰台」には、工事にちなんだ古蹟等があり、当時の難工事の状況と、北館大学の苦勞が大堰誌からうかがえる。

### 「十六堂」

この工事中最も難儀を極めた場所は、第一に清川の入入口、次に清川以下三ヶ沢までの所にして、所々山腹を切開いて行く箇所であった。なかなかの難所続きで谷深く道険しく、あるいは、大岩畳々と重って行く手をはばむという有様で、作業は遅々として進まなかった。前日苦心惨たんしてせっかく築きあげた堰台も、翌朝来て見れば堰底に何百貫もあるような大石がころげ落ちていたり、あるいは崖崩れで土砂に埋まっていたりして、人夫たちの落胆することも一再ではなかった。

ちょうど清川の御所王子神社の下まで来た時である。神社の山下で作業今や半ばのころ突然崖が崩れて大轟音とともに、大岩石や土砂がなだれのごとく落下して、運悪くその直下で働いていた16人の人夫は、アッという間もなく惨死する一大修羅場と化して、上を下への大騒動である。てっきり神罰に違いないとして、いずれも色青ざめワナワナと生きた心地もなくふるえ上った。これに恐れをなした者間もなく一人去り二人逃げして、いつの間にか姿を消す者も数多く出る始末であった。現在は、その場所を十六堂といい、土地改良区にて慰霊碑を建て故人の冥福が祈られている。

### 「青鞥の淵」

第一の難所清川の「堰台」工事が始められた。ここは先にも義光公の御前にて論議の焦点と成りし所、最上川の激流は山腰の絶壁をかみ、深淵渦を巻く物すごき状をなしたる所であった。ここに堰台を築くにはまず第一にこの淵を埋めなければならない。この淵を埋めることができるか否かは、実に工事の成功か不成功かの大きな岐路であったのである。

数多くの人夫たちは各奉行指揮の下に、岩を崩し土石を運び次々に投入してこれを埋め「堰台」を築き立てしも終日の労苦は一夜の中に破壊されむだになる有様で幾日繰返すも同じ状態であった。

大学はじめ各奉行の面々はいずれも腕をこまねいたまま、淵を見つめるばかりで、茫然として成すすべを知らなかった。ことに大学は焦躁の余り頬は落ち眼はくぼみ、髭を剃らぬ顔はことさらにやつれを見せて、沈痛の色を面に浮かべて吐息をもらし苦慮するさまは、傍の眼にも痛々しかった。

人夫たちは此の淵に住む魔物の仕業であろう等と取沙汰いたし、或いは恐れ或いは落胆して最初の意気込みは何処へやら、仕事に対する熱意も今は次第に薄れがちであった。

### 一奉行の妨害

この時、志村伊豆守光惟は機を得たとばかり、「既に埋立ててより五日にも成るが、未だに何のしるしも見えず、此の上は何程日数を費やすとも凡て無駄な事と存ずる。堰成就は到底成り難し、武士に二言は無い筈、此の上は君公の御前で誓った如く、速やかに御決心なされたが宜しかろう」と皮肉たっぷりに詰寄った。

大学は心中の憤満やる方なく、ハッタとなり光惟をにらみつけたが、十中の十まで事業遂行不可能という現状に今は最早絶体絶命、加うるに豪放果断な大学も今やこれまでと、「業ならざる時に腹を切るは、当初より既に覚悟せし所、今更貴殿に言われる迄もなし」と血を吐く想いで絶叫するや否や、天運吾に与せず吾命運のつきるところと、静かに諸肌押しくつろげて今や将に刃を腹に突き立てんとしたこの時、奉行の一人芹田伊予があわてて走り寄り、大学の手を押えて、アイヤ暫く、「未だ工事着手以来幾何にも成らずして御自害あるは、大学殿にも似ずいささか短慮の事と存ずる。世の中には天佑神助という事も御座る。今暫く様子を見た上でも遅くは御座るまい」と押し止めた。

魔の淵は依然として無気味な色を湛えたまま埋る気色は少しも見えず。涙ぐましいばかりの努力もすべては徒勞であった。大学の運命も今は最早これまでか、と心あ

る奉行や家中の人々は、いずれも暗澹として沈痛の色を面にたたえ互に見交すばかりであった。

大学はある日よいよ決心のほぞを固めて沈思瞑目が乗馬より、秘蔵の青貝摺の鞍を解きこれに大石を結びつけ、日ごろ崇敬怠らざる八幡熊野の諸神を念じ心死の形相物すごく、「何卒此の淵を埋めさせ給え」と神を念じて鎧諸共逆巻まく深淵の真中にザンプとばかり投げ込んだところ神も納受したか、アラ不思議今まで荒狂い渦巻き立ちし水面もたちまち油を流した如くに静かに澄みて、水さえも少し引いたかように思われた。人夫どもは元氣百倍し先を争って山を崩し岩石を投げ土俵を埋め、あるいは根付の大木を倒し掛け、昼夜をいとわず必死の作業を続けたので、遂に埋めることができた。後世ここを「青鞍の淵」と呼びこの辺一帯を、「大堰台」と称し、そのころの難工事を偲ぶ記念語として現在にいたり、土地改良区で石碑を建立している。

#### 4. 古文書からの工事状況

慶長17年(1612年)6月15日、大堰の工事完成約1カ月前に主君義光が、大学にあてた書状がある。この書状では大学のこれまでの大堰企画と工事にあたって、八幡宮に祈願したことやすべての苦勞と行動がうかがえる。

「其方の大堰工事も大分進行し、昼夜の苦勞誠に察します。取入口の工事もできて、豊富な水が、とうとうと河より通ったと聞いた。工事を企てた時に、其許は八幡宮に願をかけたとのこと、そのかいがあって、工事の大半が終了を見ることができ、完成後は末代までの重宝である。末々までの水を用いて新田が開け、何万石もとれる事であろう。これからあとも益々八幡宮を有難く心得て狩川の住民に参詣を怠らぬように申付けよ。

なおそちらは、河風が大変寒いので頭巾を一つ取らせ。くわしいことはかさねて申上げる」とあって義光の大学をいたわっているあたたかい心がしみじみと感じられる。

#### 「義光の書状」一

其許関普請大分之儀出来仕貴殿夜昼之苦勞察入事候就夫関出来水卓山河ヨリ通候由首尾能成就大慶之至ニ候右関企之時分其許之八幡宮へ貴殿立願懸被申候大分之儀存分之通出来末世迄之重宝末々其水ヲ用ヒ新田何万石出来可申候哉今以後八幡宮難有存狩河之者共参詣申様可申付候神領之判形先日弁久庄兵衛持参申付候則太輔へ相渡候由無油断日夜勤行可相勤之旨可申付候然而河風寒候間頭巾一進シ候委者重而可申入候。少将出羽守印。

工事完成は、工事打止の標杭打ちを、同年7月21日、工事を着手して4カ月、工事企画以来10有余年とある。

次の古文書は、大堰完成につき、義光より賞として、新たに大堰開削によって、用水かかりになった地区、無音村(現東田川郡藤島町大字無音)300石の加増地と、さらにこの用水で今後の新田からとれた分は、加増とされることある。

#### 「義光の書状」一2

1. 今度本之知行ニ引足シ半物成三百之処取ラセ置候永代可致安堵者也、霜月十九日。出印。

次は、加増地の引渡書である。

無音村年貢之覚。高、一、四百四十四石七斗九升者、此内、二石一斗七升八合ハ、算用違引、一石六斗ハ、苗代植付引、六十九石七斗一升ハ、羽黒塔別当領引、当納三百七十一石三斗二合ハ、右之内、百九十六石ハ、御加増之分、九十七石六升六合ハ、荒地御引足分、メ二百九十三石六升六合ハ、但半物成、残ル半物成、七十八石二斗三升六合、御蔵入之分、右地所相渡者也仍如件、慶長十七年十一月廿七日、進藤但馬印、原美濃印。

2. 今度其方命ニ掛ケ大分ノ普請申立候処見立之通成。就大分ニ水寄候由諸々其方手柄殊ニ末代領分之宝ニ候右之為褒美以来此用水ニテ出来申新田何万石出候トモ其方知行ニ結ヒ何為取候。

慶長十七年十二月二十日、出羽守、義光印。

大堰開削前後の開発状況

開発年代	村落数	開発年代	村落数
慶長	2	承応	4
元和	13	明暦	3
寛永	17	万治	1
正保	2	寛文	2
慶安	6	その他不明	

承応4年(1655年)の調、総石高24,185.23石  
明治18年調、面積4,180.9527町

### III. おわりに

北橋大堰は、旧幕時代荘内の藩庁の支配下におかれ、管理は郡奉行の職分に属し、実務は大庄屋、大堰守、杖突等が担当してきた。

現在では、大堰約5,000ha、吉田堰約1,900ha、合計6,900haの受益面積であり、最上川土地改良区が管理をしている。

大堰開削以来370年、先覚者たちの開拓魂として、永久に受継がれている。現在この地区は、用水改良(昭和28年~昭和46年)、排水改良(昭和39年~昭和52年)、県営灌漑排水事業等が完成し、現在県営圃場整備事業が実施されている。

[1982. 2. 5. 受稿]